『マッチ』

作者　淺羽　一

他人どころか自分さえ信じられなくなりそうな現実、出口どころか道筋の正解も見つけられない現状、それはまさしく真っ暗な洞窟を手探りで進んでいくかのごとくだ。
目を凝らして先を睨んでも、視界のプールに黒いインクをぶちまけた世界はまるで無限に続くかのようで、かといって瞳を閉じれば肌に感じる風はなく、ただただ閉塞感と圧迫感が押し寄せる壁さながらに襲ってくる。
いっそ爆弾でも仕掛けて全てを吹き飛ばせば雲一つ無い青空に出会えるのかも知れないけれど、実際はその前に壁が崩れて天井が割れて、あっという間に生き埋めになってしまうのがいともあっさり想像されて。果たして瓦礫の山から這い出る事と暗闇をすり足で歩く事ではどちらの方が簡単なのか、正解なんてやはり確かめようがない。
あぁ、と心から思う。小さくても良い、一つだけでも構わない、せめて目の前に光る何かがあったなら、それは単なる目印としてだけでなく救いにだってなってくれるだろうに。吹けば消えそうな蝋燭の灯りでも、暗闇の中で揺れてくれればそれは即ち永遠を終わらせる光明にだって成り得たのに。
頼りなく握りしめた手の中には、いつしかふやけてひしゃげたマッチの箱が。その気になればいつでも火なんて点けられるんだと、気取って勿体ぶって使おうとしなかった湿ったマッチが時折かしゃかしゃと小さく小さく鳴っては消える。
今は決して夢でなければ虚構でもなく。ただ世界を眺める視点が少しずれただけで、一切は容易く色を失い輪郭を溶かす。
けれど、だとすればこそ、もしかしたら何処かにはこの世の全てが輝いて見えるような場所が—。
分からない。仮にそんなものがあったとしても、そもそも迷わず辿り着ける保証もない。
何故なら少なくとも現状は暗く一歩先の地面の感触さえ足を進めるまでは分からない。とは言え、動かなければ見え方なんて変わるはずもなく。
要するに、一方ではそれこそ至極簡単な話なんだろう。正解が分からない問題だとしても、それが存在しないわけでない。一万通りの答えがあるなら、一万回の可能性を試してみればいつかは正解を引き当てる…途中で止めさえしなければ。
果たして今は何回目で、残り何歩で終わるのか。いや、それ以前に自分はどんな問題を解いているのか。
何もかもが曖昧になる真っ暗闇のただ中で、かしゃかしゃと覇気のない音が響く間もなく鳴っては消える。

〈了〉